

## コラム -- ヨルダンの公共図書館を訪ねて（特集 開発途上国における図書館の役割と支援活動）

著者	高橋 理枝
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	126
ページ	15-15
発行年	2006-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005517">http://hdl.handle.net/2344/00005517</a>



ヨルダン市中央図書館の参考図書閲覧室  
(2005年7月、筆者撮影)

## 〈コラム〉

# ヨルダンの公共図書館を訪ねて

高橋理枝

ヨルダンの図書館活動は一九五〇年代に始まり、現在では公立と私設を合わせて、全国約一五〇〇の図書館が存在する。今回は、首都アンマンにあり、先進的な役割を果たしている二つの公共図書館、アンマン市中央図書館及びアブド・アル・ハミード・シューマン公共図書館（以下シューマン図書館）を訪問した。アポ無しで突然訪問したのだが、そこは良くも悪くも融通の利くアラブ圏のこと、両図書館とも快く館内を案内してくれた。

アンマン市中央図書館は、一九六〇年に設立され、現在では三二の分館を統括している。市全体で総蔵書数は約五〇万冊である。シューマン図書館は、アラブ銀行の創設者の名にちなんだアブド・アル・シューマン基金によって、一九八六年に設置された。児童図書館を含め、全国六カ所に図書館をもち、全蔵書数は約一七万冊である。どちらの図書館も、所蔵分野は多岐にわたる。日本関係の棚では、新渡戸稲造著の英語資料を見ることができた。

両図書館は、移動図書館の運営、絵本の読み聞かせ、郷土資料の収集といった、日

本の公共図書館でも馴染みの活動を展開している。また子供の絵と楽しげな声にあふれる児童図書室の風景は、どこも変わらぬものだ。しかし、日本の公共図書館とはかなり違った印象を受けたのも事実だ。

まずは英語資料が日本に比べて格段に多い。どちらの図書館も英語資料がフロアの一角を占めている。それに学術的なデータベース（インターネットフェイイスは多くが英語）の導入も目を惹く。シューマン図書館では、データベースコーナーが設置され、無料で利用できる。中央図書館内には電子資料はないが、アンマン市は「アラブ文化首都アンマン二〇二〇」を打ち出し、二〇〇二年に電子資料に特化した図書館を別設立した。日本でも最近では、外国語資料の収集や電子媒体の提供を進めている公共図書館もある。しかし、規模としてはまだまだ小さい。私が昔アルバイトをしていた某市立図書館で、最も人気があったのは小説と趣味（特に裁縫と料理）だったが、ヨルダンでのニーズはずいぶん違うようだ。

ではこれらの図書館をどんな人が利用するのか。シューマン図書館からもらった利用者統計を見よう。この統計によると利用者の半数弱を学生が占めている。サラリーマン、自由業がそれぞれ二〇%前後で続く。学術資料が大学図書館に集中している日本と違って、ヨルダンでは公共図書館も学術情報探索のために利用されていることが窺える。また男性が七〇%と圧倒的

多数を占めるのも注目に値する。確かに館内を案内された時も、男性が多かった。大学生の男女比はほぼ同数なので、学生以外の利用者に圧倒的に男性が多いか、それとも職種を問わず男女で情報探索行動に違いがあるのか、興味がわくところである。

さて活発に活動を展開しているヨルダン公共図書館ではあるが、惜しむらくは資料への自由なアクセスが保障されていないことだ。図書館によっては、イスラエル関係資料等、政治的、宗教的観点等から、一部の資料の閲覧を制限している。日本では「図書館の自由に関する宣言」（一九七九年）で、国民の知る権利を保障するための図書館の責務が謳われたものの、一九九〇年代には『ちびくろさんぼ』のような資料の閲覧の是非をめぐる議論が展開された。どんな資料を収集して閲覧に供するかは図書館が抱え続ける課題であろうが、ヨルダンについてはこうした議論自体あるのかどうかが不明だ。一九九〇年代以降民主化を進めるヨルダン政府は、情報リテラシーに力を入れているようだが、今後は情報の公開と自由な議論も保障されていくことを望みたい。

（たかはし りえ／アジア経済研究所図書館）